魔法少女リリカルなのはStrikerS:Cruel Formula

時給145円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ：Ｃｒｕｅｌ　Ｆｏｒｍｕｌａ

【Ｎコード】

Ｎ５２７７Ｏ

【作者名】

時給１４５円

【あらすじ】

オリジナル主人公を交えての魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ再構成。

駄文かつ亀更新（多分）、軽い気持ちで読んでやって下さい。

プロローグ：ある終わり（前書き）

ぷろろーぐ

プロローグ：ある終わり

「――――」

「……そうだ。これで、いい」

朱に染まる視界、耳を打つ凛とした声音。
充満する鉄の臭いと、指先の感触が己の過ちを理解させる。

「当然の報いさ、多分な。
……いや、お前に看取られて逝くんだ。良くこそあれ、悪くはない、か。
母親役なんて柄じゃないと思っていたんだが、存外……、楽し、かっ、ッ」

咳き込むと同時に、かなりの量の血が吐き出される。

当然だ。むしろ、心臓とリンカーコアを破壊されていながらここまで保ったのが奇跡に近い。

「……あー、まったく。いかんな、もうあまり長くは保たんらしい。
――だから、これが最後だな」

理解出来ない。明らかな死を前にして、彼女は何故こんなにも穏やかに笑っていられるのか。

「これから先は、お前の好きに生きたらいい。お前はその資格も権利も持ち合わせている。

善人として生きるも、悪人に堕ちるもお前次第だ。好きにやれ」

「僕、は……」

「さよならだ。願わくば、お前の行く先に幸多からんことを――――」

光を失った瞳。熱を失った身体。
総身を血に濡らし、力無く崩れ落ちた彼女の姿。

この日、僕は何よりも大切だった人を、殺した。

／

Ｒａｆｔ　Ｖｅｒｕｓ（ラフト・ウェールス）事件

新暦６６年、第４７管理世界で行われていた違法研究の一斉摘発の際に発生した（していた）殺傷事件。
事件の舞台となった研究施設において、非人道的な研究が繰り広げられているという情報を入手した本局は、
複数の魔導師を投入した強制捜査による事件の早期決着を計画、実行した。

しかし、管理局員が突入した際には既に関係者は１名を除き全て死亡していたとされる。
生存者はおよそ１０歳前後の少年、ラフト・ウェールス。

発見当初、彼は重度の錯乱状態にあり、保護を行おうとした局員に

対し激しい抵抗を見せた。

結果、６名の局員が重軽傷を負い、研究施設の一部が破壊されることになる。

幸いに、というべきか。援護に駆け付けた魔導師２名――高町なのは武装隊士官候補生（当時）、
およびフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官候補生（当時）――の協力もあり、対象の確保に成功した。

その後、殺人を含む複数の容疑でラフト・ウェールスを起訴。本人は全ての罪を認め、極刑を望んだ。
が、特殊な環境での生活や、容疑者本人から検出された違法薬物反応（かなりの頻度で多量に投与されていたらしい）、
更には１０歳前後という年齢と本人の境遇等から、

「被告には充分な責任能力、状況判断能力があったとは言えず、故に情状酌量の余地あり」

と判断され、最終的な罰則は数年間の保護観察処分と数ヶ月に渡る更正プログラムの施行に留まった。
尚、現在の彼は無事、更正プログラムと保護観察期間を終え、聖王教会に籍を置いている（身元保証人はカリム・グラシア理事官）。

〈以上、管理局データベースより抜粋・要約〉

プロローグ：ある終わり（後書き）

続け

一話：はじまり、はじまり（前書き）

どうしてこうなった

一話：はじまり、はじまり

／新暦７５年　ミッドチルダ北部　ベルカ自治領　聖王教会

人生には刺激が必要だと昔の偉い人は言ったらしい。

山も谷もまるでない平坦な日常の繰り返しは、人の性根を腐らせて壊死させるとか何とか。

あながち間違ってはいないし、そういうものかなと賛同出来る部分もあるのだが、一つ聞きたいことがある。

「刺激は刺激でも、不必要な刺激もきっとありますよね？」

「アナタはいきなり何を言っているんです？」

摩訶不思議な生き物を見るような目で、僕を見つめる聖王教会所属の尼僧――シスター・シャッハ。

僕としては、何故アナタが首を傾げているのかが解りません。

「……正直、夢なら即刻醒めて欲しいとすら思っているんですが、何が起きているんですか？」

「“何”がアナタの状態のことを指しているなら、拘束したうえで逆さ吊りになっていますね」

なるほど。道理で世界の上下が逆転しているわけだ。ついでに頭に血が溜まってきてかなり気持ち悪い。

というか、この拘束スゴいな。無駄に洗練された無駄に無駄の無い術式で編まれた三重構造のバインドである。

そんな情け容赦の無さ過ぎる拘束を受けた状態での逆さ吊りは、端から見れば完全にミノムシだ。
人権侵害にも程がある。

「ところで、何でまた僕はこんな目に？特に悪さをした覚えは無いんですけど……」

全く身に覚えがない。それに怒られると解っているのに悪さをするほどバカではないのだ。
3ヶ月ほど前、空腹を堪えきれずに来賓用の茶菓子を食べ尽くした時には、それこそものスゴい勢いで怒られたが。

「いえ、理由は特に……むしろ私は止めたんですが」

？　どういうこと？

「それは私が教えたるわ！！」

バーンと、勢いよく扉を開けて入って来たのは、管理局の制服を着た小柄な女性。
現在出世街道を驀進する管理局のエリートにして、“歩くロストロギア”。その名も――

「あ、はやてさん。お久しぶりです」

「うん、ラフトくんもお久しぶり。相変わらずやね」ＯＫ、謎は全て解けた。犯人はこの人か。
大方、僕の反応を見て笑いのネタにしようとでも思ったのだろう。
まあ別にそれはいい。いや、出来れば自重して欲しかったが、これくらいなら大したことはない。

それより、そろそろ本格的にヤバそうなので、早く下ろしてもらえないだろうか。

「……そら、な。吊してから３０分くらい普通に寝とったし」

「いや、そこは無理にでも起こしましょうよ」

本当に危ない。

「それ以前に寝続けられることがおかしいと気付きなさい」

これ以上ない正論である。

しかし、これは仕方ないことなのだ。睡眠中は無防備になるものだし。

「それに多少違和感があったところで、眠かったら寝るでしょう？」

「本能に忠実に生きとるな～」

自分としても何とかした方がいい気はしている。

だけど世の中には、どうにもならないことだってあると思うのだ。

「買い食いを控えようと思った3分後には屋台でたい焼き買ってたことありますし」

「自制心無さ過ぎるやろ！？」

うむ、やはり友人との雑談は実に楽しい。上下が逆じゃなければもっと楽しいだろう。

というか、はやてさん解っててわざとやってません？

「あ、バレた？」

「いや、本当にそろそろ勘弁して下さい」

その後、バインド解除と同時に墜落。床で顔面を強打したのは言うまでもない。

／

爆笑するはやてさんが落ち着くのを待って、要件を聞くことにする。

まさか僕への悪戯のためだけにわざわざやって来るなんてことは……

……ありそうだが、一応確認はしておくべきだろう。

「ああ、カリムに用があるんよ。ラフトくんにも関係ある話やから、一緒に来てな」

ふむ、カリムさんに用があるのは解るが、僕にも関係することって何だろう？

「まあ関係あるって言うても、決定事項を伝えるだけやし。難しく考えんでもええで」

「友達の頼みならよほどのこと以外は聞くつもりですけど、当然のように拒否権が無いと少々複雑ですね」

気にしたら負けや。と笑うはやてさんに手を引かれ、僕はカリムさんの部屋へと向かうのだった。

一話：はじまり、はじまり（後書き）

続けば……いいと思うよ？

二話：準備期間（前書き）

騎士カリムを期待してた人には本当に申し訳ないことをしたと思っている

二話：準備期間

／

「機動六課っていう試験部隊作ったから、ラフトくんも参加してな？」

ミノムシ事件から数分後。はやてさんから聞かされたのは、新設部隊への出向の辞令だった。
疑問形にも関わらず断定口調である。あと書類とかも渡された。

カリムさんもこれをあっさり了承しており、僕の頭で考え得る限り逃げ道はない。
いや、別に元々逃げる気は無かったけれども。

「ん、まあ了解です。ところで、それっていつからですか？」

「十日後」

微妙に猶予が無い。何でまたこんなタイミングなのか。

「ほら、部隊毎の魔導師の最大保有ランクってあるやろ？」

戦力が一極化しないための措置、でしたっけ？
一部隊に所属する魔導師のランクの合計が一定値以上になってはいけないとかいう。

「大雑把に言うとそんな感じやね。
細かい話をすると、部隊の規模とか目的とか、仕事の内容とか量な

んかによって多少の融通はきくんよ。
危険な任務を任されるのに、高ランク魔導師を投入出来ない。なんてことになったら、本末転倒やろ？」

確かに。まあ普通そういう事態になったら他の部隊と連携とったり、必要に応じて応援に来てもらったりするのが基本であろう。
他所から常に助けて貰い続けるのは、部隊として明らかにアレだが。

「騎士カリムを含めた後見人の力添えもあって、六課は試験部隊としては破格の保有ランクを実現しとる」

「名簿見せてもらいましたけど、本当にスゴい面子ですよね」

正直、よく許可が下りたなと思う。もはや戦力の一極化とかいうレベルではない。
一応は地上本部に属するらしいが、レジアス中将あたりに喧嘩売ってるとしか思えない人事である。
僕、あの人苦手なんだよな。悪い人ではないと思うんだけど、顔が怖すぎる。

「流石に隊長陣は能力限定付けとるけどな。
いくら何でもオーバーSやニアSをそう何人も入れられへんし」

実際、はやてさんは4ランクダウンさせるらしい。弱体化するにも程がある。
超出力が最大の売りである広域殲滅型魔導師の特性を奪ってどうするのか。
広域殲滅魔法を乱射するような事態はそうそう無いと思うけど。
むしろあったら困る。この人、その気になったら都市の一つや二つ軽く更地に変えられるし。

「ほとんど裏技使ったごり押しやから、あんまり褒められた話やないんやけどね」

でしょうね。と、バカ正直に言うわけにもいかず、曖昧な微笑で答えることにする。

多分はやてさんなら笑い飛ばしてくれると思うが、僕は空気を読むことにした。

社会で生きていくうえで、空気を読むスキルは必須である。

模擬戦の最中に「お腹空いたんでもう止めません？」とか言ったら怒られるのだ。

あの時のシグナムさんは怖かった。今でも偶に夢に見る。

それはさて置き。

「あの、ちょっと疑問に思ったんですが……コレ、僕って必要ですか？」

これだけ戦力が揃っている中に僕が交ざっても、はっきり言って邪魔にしかならないと思うのだが。

そもそも、保有ランクの件はどうするつもりなのか。

許容量限界まで使い切ってる状態で更に追加、っていうのは普通無理でしょうに。

「んー、フォワード４人は新人やし、保険は用意しとかなあかん。戦力も足りんより余るくらいのほうがええ」

「聖王教会からの出向、という形だからランクの件は何とか大丈夫よ。制限はされるけどね」

２人とも解答ありがとうございます。
けど、カリムさん。心臓に悪いんで、いきなり話し始めるのは控えて欲しいんですが。

何が楽しいのか、相変わらずの笑顔で「考えておくわ」と言いつつ紅茶を飲む我らが少将。
この人が身元保証人になってからもう何年も経つが、未だに考えてることがよく解らない。

「てなわけで、ラフトくんも能力限定付けて貰うな。ラフトくんは３ランクダウンでええわ」

「スイマセン、ちょっと待って欲しいんですが」

３ランクダウンってことは、Ａまで落とせと。

「別にええやん。近接型やし、雑魚相手ならＡで充分やろ？」

そうではあるが。

「それに、なのはちゃんやフェイトちゃん、ヴォルケンリッターもおる。
だからラフトくんがＡまで落としてても大丈夫や」

僕はいなくてもいいんじゃないか？という疑惑が強化された瞬間だった。

その後も色々とあったのだが、基本的に雑談メインのお茶会だったので割愛。

／

こんな感じの会話をしたのが一週間前である。
荷物をまとめたり、手続きを済ませたりしていたら、本当にあっという間に時間は過ぎて行った。

僕の手際が悪いのが大きな原因ではないかという説をシャッハさんが提唱していたが、それは違うと思いたい。

宿舎へ荷物を運び込み、他の部屋へベルカ式引越蕎麦を配るべきかと割と真剣に悩んでいると、
突如として現れた赤毛ポニーテールに拉致された。
あっという間に車に放り込まれ、そのまま発車。正に一瞬の犯行であった。

「久しぶりだなウェールス。半年ぶりくらいか」

「お久しぶりですシグナムさん。そしてこれは一体何事ですか？」

ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム。古代ベルカの騎士にして、生粋の戦闘マニア。
その戦闘力は凄まじく、一騎打ちにおいては管理局でも最強の一角に数えられる実力者である。

「大したことではない。自分の分隊の新人2人の迎えだ。少し付き合え」

模擬戦の誘いではないらしい。助かった。この人の相手は大変なのだ。

「シグナムさんとこの分隊ってことは……ライトニングでしたっけ？」

フェイトさんが隊長で、シグナムさんが副隊長をやるらしい。
若干の不安を感じてしまう人選なのは、僕の気のせいではないと思う。

「ああ。確か、お前は新人2人とも知り合いだっただろう？
知った顔があるほうがいいだろうと、主はやてが仰ってな。
本来はテスタロッサが来たがっていたんだが、外せん用事があるらしい。
そこで、お前を誘ったというわけだ」

誘ったというか、連れ去られたされたわけですが。

とりあえず用件は理解出来た。つまり僕は目印代わりか。
正直、あの2人は年齢の割にしっかりしてるから、シグナムさんがいればそれで充分な気がしないでもない。
フェイトさんは凄い親バカもとい心配性だから不安なんだろうけど。

「話は変わりますけど、引越蕎麦って配ったほうがいいですよね？」

「当然だろう。ベルカ騎士的に考えて」

やはりそうか。

二話：準備期間（後書き）

感想くれれば作者は喜ぶと思うの

三話：蕎☆麦（前書き）

主人公の容姿の細かい部分は各自補完でお願いします。

三話：蕎☆麦

／

どうせ出迎えをするなら、出来るだけ分かり易いほうがいいだろう。
2人とはちょくちょく様子見がてら会ってはいたが、もしかしたら忘れられてるかもしれない。
会った瞬間「え、誰この人？」みたいな展開は嫌だ。微妙に有り得そうなので全く笑えない。
フェイトさんとかと違って、僕はキャラが薄いのだ。強く印象に残っているとは考え難い。

ならばどうするか。簡単だ。薄いんだったら無理矢理にでも濃くしてやればいい。
味噌汁しかり、カ〇ピスしかり。何か違う気もするが、僕はやれば出来る子なのできっと大丈夫。
根拠などはまるでないが。

「シグナムさん、ちょっとそこのコンビニに寄ってもらえません？」

「断る」

即答だった。
事情を話して納得してもらおうとしたが、レヴァンティンを首筋に突き付けられたので断念。
このままでは何の対策も出来ずに2人に会うことになってしまう。

「そう心配しなくても、お前は充分に目立つから大丈夫だぞ」

「御冗談を」

「いや、冗談ではなく」

／

結論から言えば、２人とも僕のことをはっきりと覚えていた。意外である。
仮に僕が自分みたいな奴に会ったら、確実に次の日には忘れてると思うのだが。
それくらい地味なのだ、僕は。

「ラフトさんの銀髪、地味どころか相当目立ってますけど……」

「エリオ、残念ながら僕の髪は銀色じゃなくて黒ずんだ灰色ですよ？」

八神家のリィンみたいな色なら良かったのに。彼女の髪はそれこそ銀色である。
どうせならこんな中途半端な色じゃなく、あれくらいまで突き抜けて欲しかった。

「ラフトさんは、かなり存在感あると思いますけど……」

「そんな要素がどこに」

「凄く背が高いです！」

キャロが満面の笑みでそう答えたが、正直反応に困る。
そりゃあエリオやキャロに比べたらそうだが、そこまで極端に高いわけじゃない。
せいぜいシグナムさんより頭一つ高い程度である。

「それに黙ってれば凄くカッコいいです！」

「ありがとう、キャロ。お世辞でも凄く嬉しいよ」

前半部分がちょっと気になったけど、そんなものは些細なことだ。

その後、先程と同様にシグナムさんの運転で隊舎まで送ってもらった。
シグナムさんには、八神家へベルカ式引越蕎麦を渡す時にでも改めてお礼しようと思う。
お風呂好きな人だし、温泉の素とかそんな感じの物を。

／

エリオとキャロを隊舎のそれぞれの部屋まで送り、一通り荷物の整理を手伝ってから自室へ戻る。
もう少し話していてもよかったのだが、僕には蕎麦を配るという使命があるのだ。
２人とも首を傾げていたが、子供なら知らなくても仕方ない。
山積みにされた段ボールの中から蕎麦の入った物を見つけ出し、封を開けていると４つ目あたりで黒い宝石が飛び出してきた。

《マスター、もう少し収納場所を考えて頂きたいのですが》

よく見たら僕のデバイスだった。何故か見かけないと思ったらこんな所にいたのか。

「イクリプス、どうしてまたこんな場所に？」

《蕎麦を段ボールに詰め込む作業の折、動作の流れでマスターが私も閉じ込め封をしました》

僕が原因だったようだ。

ずっと右から左へ次々と蕎麦を段ボールに詰めていたから、つい近くに置いていたイクリプスも入れてしまったのである。

《マスターはもう少し注意力を磨くべきかと思われます》

「返す言葉もない」

いや、本当に。今回は全面的に僕が悪いので即土下座である。端から見るとなかなかシュールだ。

《ところで、私がいない間は完全に丸腰だったわけですが、大丈夫でしたか？》

「実に平和だったよ。少なくとも僕の周りは」

事件が起こるわけでもなく、模擬戦に誘われることもなかった。まあ、直ぐに忙しくなるんだろうけど。

そういえば、六課での僕の仕事ってどんな感じになるんだろうか？新人達のフォローという話だけど、新人達は基本的に訓練メインだ

ろうし。そうなると僕の普段の業務って一体……？

《それはいずれ解ることです。まずは最優先事項を片付けるべきかと》

「ん、それもそうか」

早く配らないと日が暮れてしまう。

僕は大量の蕎麦を抱え、再び部屋を後にした。

／余談・電気少年の場合

ラフトさんがさっき話していた通り、引越蕎麦という物を持ってきた。

蓋を開け、熱いお湯を注いで3分待てば完成だ。僕でも簡単に作れる。

（何でだろう、美味しいけど何かが激しく間違っている気がする）

カップ蕎麦を食べながら、ふとそんなことを考えたエリオの話。

三話：蕎☆麦（後書き）

次こそは……

四話：集結、機動六課！（前書き）

質問とかあったら気軽にどうぞ。

あと主人公のキャラがぶれてる気がするけど、きっと気のせいだと自分は信じてる。

文章はそのうち上手くなることを期待してる。

四話：集結、機動六課！

／新暦７５年　４月　時空管理局　遺失物対策部隊　機動六課隊舎
同ロビー

「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」
今日は僕の新しい職場、機動六課の発足式だ。壇上でははやてさんが発足の挨拶を行っている。
「平和と法の守護者、時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守っていくことが私達の使命であり、為すべきことです」
……むぅ、ネクタイが微妙にキツい。
普段から着慣れていないせいか、全体的にムズムズする。
《若干ですがサイズも合っていませんね。支給品なので仕方ありませんが（※念話です）》
確かに肩回りとかもちょっとキツいし、袖や裾も少し短い。
「実績と実力に溢れた指揮官陣、若く可能性に溢れたＦＷ陣、それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ。
全員が一丸となって、事件に立ち向かって行けると信じています」
《後日、改めて採寸し直しましょう（※念話です）》
それがいいかも。普段から着る仕事着だし、きちんとサイズは合っ

てたほうがいい。

「ま、長い挨拶は嫌われるんで、以上ここまで。機動六課課長および部隊長、八神はやてでした」

はやてさんの挨拶も終わり、発足式はお開きとなった。
マルチタスクを使って聞いていたが、やっぱり凄いなー。よくあんな挨拶が出来るものだ。

《マスターも練習すればよろしいかと》

「してもする機会がないと思う」

指揮官の資格持ってないし、これから先に取る予定もない。誰かに指示を出すのは柄じゃないのである。

「そういえば、これから早速仕事でしたっけ？」

《肯定します。尚、マスターのコールサインはロングアーチ０８。通常業務は主に各所の手伝いおよび雑務全般となっております。出撃の際はＦＷ陣のフォローも任されておりますので、ご注意下さい》

「ありがとう、イクリプス」

《恐縮です》

さあ、雑務頑張るぞ。

／

雑務検定四級の僕にかかれば大抵の雑用はお手の物なのだが、今回はどうも上手くいかない。
そもそもスタッフが充実していて、専門知識が必要なことも多いため手伝えることが少ないのだ。

これは遠回しに何もするなと言われているのだろうか？

何かやることはないかとフラフラしてみれば、何やら遠くの方で爆発が起こっている。テロでもあったのだろうか？
だとしたら犯人はご愁傷様だ。よりによってここを選ぶなんて。しかし、その勇気は讃えたい。

そんな勇気あるテロリストを一目見てみようと、未だ断続的に爆発音が聞こえる方へと行くことにした。

「あん？なんだ、ラフトじゃねーか。お前もなのはの教導見に来たのか？」

目的地に到着した僕を待っていたのは、海上に浮かぶ見慣れないビル群と、
それを厳しい視線で見つめるヴィータさんとシグナムさんの2人だった。
どうやらあの爆発はテロではなく、新人達の訓練で起こっているものらしい。

せっかくなので、僕も観戦することにした。対ガジェット戦を行っているが、今は少し苦戦しているようだ。

《ＡＭＦの対処に手間取っているようですね。
現時点の新人達のレベルでは、対応するのは困難でしょう》

みんな才能は充分あるけど、経験とか技術はまだまだってことか。
まあ、なのはさんならゆっくりじっくり確実に育てていくだろうから大丈夫。

それにしてもＡＭＦか。
僕はああいう防御系魔法にあまり苦戦したことが無いのでよく解らないのだが、
そんなに厄介なものなのだろうか？

「そりゃあ単にお前が実戦経験豊富で、ぶち抜けるだけの力量があるから言えることだ。
高ランク魔導師にとっては大したことなくても、それがそのままひよっこ共にも当てはまるわけじゃねぇ」

「ヴィータの言う通りだ。
我等にとってはさしたる脅威ではないが、大多数の魔導師にとっては厄介な存在に違いない。
……実際、墜とされる者も少なくはないからな」

予想以上に厄介な代物だったらしい。
ガジェットとは何度か戦ったけど、はっきり言って、
逃げるのを追いかけ回すのが大変ぐらいにしか思っていなかったのだが。
そんなに危険なら、新人達のフォローもきちんとやれるよう僕も訓練をやっておくべきか……

「それがいいだろうな。では、早速始めるか」

「ちょうどいい機会だしな。アタシも付き合ってやるよ」

……ん？

／

口は災いの元、とはよく言ったものだ。やはり先人達の知恵だとか経験談は侮れない。

「どうしたウェールス。早く用意をしろ」

既に騎士甲冑に身を包み、レヴァンティンを構え準備万端のシグナムさん。やる気満々である。

助けを求めてなのはさんの方を向いてみれば

「はい、それじゃあシグナム副隊長とラフトくんが模擬戦やるから、戦い方とかみんなよく見て参考にしてね」

むしろ推奨していた。

新人達に軽い休憩を取らせつつ、教導に利用するつもりらしい。

「近距離での捌き方とか、特にスバルとエリオは参考に出来ることが多いかもね。

ティアナとキャロも、自分ならどう援護するかとか考えてみようか」

はい！と元気よく応えるＦＷ陣。

やるしかないのか。出力リミッターでかなり弱体化してるのに。
《それはシグナム副隊長も考慮して下さるでしょう》
だといいけど。
……あんまり待たせると怒られそうだし、そろそろ逝こうか。
「――イクリプス、セットアップ」
《了解。騎士甲冑、展開します》
全身が濃紺の魔力光に包まれ、一瞬でスーツから騎士甲冑へと姿が変わる。
自分の魔力光と同じ濃紺色のインナーに、腰のあたりに装甲が付いた黒いズボン。
両脚には脚甲が取り付けられ、踝まである丈長の黒いコートを羽織り、両腕には戦闘形態へ移行したイクリプスが装備されている。
イクリプスの外見は、手の甲に黒い宝石の付いたガントレットと言ったところか。
血管のような模様が全体に浮き出ており、相変わらず妙に禍々しいデザインだ。
「制限時間は３０分。制限時間を過ぎるか、どちらかが直撃を受けたらそこで終了だ。
能力限定付きだし、新人に見せるならこんなもんだろ」
審判はヴィータさんがやってくれるらしい。
シグナムさんは少し不満そうだが、それくらいのルールがちょうどいいだろう。
いきなり血戦なんか見せたりしたら、新人達にトラウマを作りかね

ない。

「2人共、準備はいいな？」

空中で向かい合う僕とシグナムさんに、ヴィータさんからの最終確認が行われた。

もう後戻りは出来ない。

「――始めっ！」

「レヴァンティン！」

「イクリプス！」

開始の合図と同時に、カートリッジを使用しつつ間合いを詰める。

シグナムさんも同じこと考えていたらしく、一直線にこちらへ向かって来る。

そして――

「紫電、一閃！」

その勢いを踏み込みに利用した、炎を纏う斬撃が迫る。

このタイミングでは回避も防御もままならない。

ならば選択肢は一つ。攻撃あるのみ。

眼前に迫る斬撃に、カートリッジで強化された拳を叩きつける。

轟音、衝撃。弾き飛ばされそうになるのを何とか堪え、その場に踏みとどまる。

シグナムさんは体勢を立て直しつつ、追撃を受けないよう後退。流

石に戦い慣れている。
それにしてもマズい。
力押しなら負けるつもりはなかったが、今のは最悪押しきられていた。
覚悟はしていたが、能力限定の影響はかなり大きいらしく、思っていた以上に威力が下がっている。
《従来と比較し出力は元より、魔力圧縮率・密度共に著しく低下。
――今回の模擬戦は正解だったかもしれません》
「確かに、能力限定時の戦闘能力を正確に把握出来るだけでもかなり意義はある。
ぶっつけ本番だったら、ちょっと危なかったかも」
イクリプスも数値上では正確に把握していたはずだが、やはり実際やってみなければ解らないものだ。
《誤差修正完了しました。先程より多少は改善されているはずです》
「相変わらず仕事が早いですね。本当に助かりますよ」
拳を握り、僅かに腰を落とす。
つい先程までと比べ、かなりスムーズに魔力が巡っている。
本調子には程遠いが、出力リミッターを考慮すれば充分過ぎるくらいだ。
《行きましょう。今度は打ち負けません》
「期待してます。イクリプス、カートリッジ・ロード！」

／※第三者視点に変わります

交錯する度に刃と拳が火花を散らす。
両者ともに小手先の技など不要と言わんばかりの、一撃一撃に全身全霊の力を込めた真っ向勝負。
正に必殺の威力を持つその悉くが、未だ直撃には到らない。
互いに相手の攻撃を寸でのところで避け、防ぎ、捌く。

「凄い」

そう呟いたのは誰だったか。
リミッター付きでこの戦闘だ。ならば、本当の意味で全力を出せばどれほどのものになるというのか。

「あ、ラフトくん今ミスしたね」

「だな。シグナムの攻撃に堪えきれずに自分から後退しやがった。3ランクも落ちてりゃ勝手も違うし、仕方ねーけどさ」

そんな新人達にとっては別次元とも思える戦いを、平然と見守るのは隊長陣2人。

「シグナムさんも微妙に動きが粗いね。私もそうだけど、やっぱりリミッターの影響が大きいみたい」

「アタシも他人のこと言えないけどさ、2人とも対人戦だと結構ボロが目立つな。

ラフトのミスもそうだけど、シグナムもさっきのに追撃かけられなかったのは明らかに失敗だ。
本人も解っちゃいるけど、体がついていかないって感じか」
「これぱっかりは、実際に動きながら調整していくしかないね。本来の動きそのものは無理でも、効率を上げていければそれに近いことは出来るんだし」

「アタシもまだ結構違和感あるし、また調整しとかねーと。
――お、そろそろ決まるな」

ヴィータの呟きと同時に、ラフトの一撃を鞘で受け流したシグナムが、逆袈裟の斬撃を決めていた。

「おーし、模擬戦終了。勝者シグナム」

「はい、それじゃあみんなも休憩終了。訓練の続きを始めようか」

／ラフト視点に戻ります

終わって振り返ると、割とあっさり負けたものだ。
いや、そもそも僕の対シグナムさん戦の勝率は3割弱だから、負けることの方が多いんだけど。

《出力リミッター付きだったので、今回はノーカウントです》

いや、シグナムさんにも付いてたから。条件は同じなんだから、潔く負けを認めよう。

《烈火の将は2ランクダウン、マスターは3ランクダウンでマスターが不利です。同条件ではありません》

本当に負けず嫌いだなぁ。

僕には勿体無いくらい優秀で高性能なデバイスなのだが、こういう時に頑固なのが玉に瑕か。

《頑固ではありません。事実を客観的に述べているだけです》

かなり主観が混じってるというか、贔屓目に見てると思うが……まあいいや。今に始まったことじゃないし。

それはそうと、新人達は本当によく頑張っている。

端から見てると、初日からオーバーワークでは？と疑問に思うくらいに飛ばしている。

実際はなのはさんが上手く調整しているので、後に引くようなことはないらしい。

生かさず殺さず、か。何ともなのはさんらしい言葉だ。

「……なんだか、凄く不愉快なことを考えられた気配がしたの」

「気のせいでしょう」

僕は基本的に友達の味方である。そしてなのはさんは友達。

僕、味方。ＯＫ？

「その態度は確実に何か考えてたの！伊達に何年も友達やってないんだからごまかしても無駄！」

むぅ、バレている。このままでは僕の身が危険だ。

具体的には星を軽くぶっ壊す砲撃とかが飛んでくる。一部の業界で

はご褒美らしいが、理由が解らない。アレは冗談抜きでトラウマ物だ。立ち直るまでは、桜色を見るだけで鬱になった。

「……また何か考えてたの」

僕はそんなに顔に出やすいのか。それともなのはさんが読心術でも使えるのか。はたまた僕の思考が周囲にだだ漏れなのか。

少なくとも、僕に隠し事は出来ないらしいことは判明した。

自分に正直に生きているから、別に隠すことなんて無いけれども。

とにかく、ここは僕の巧みな話術で切り抜けたいところだ。

こういう場面で一度たりとも成功した覚えがないが、まあ何とかなるだろう。例によって根拠はまるで無いが。

「ちょっと待ってて下さいね、なのはさん。今、上手い言い訳を考えてますから」

「何で言い訳する本人にそれを言うの！？既に台無しっていうか破綻してるよ！？」

頑張れ僕の頭脳。早くなのはさんを納得させる言い訳を思いつくんだ。

――――よし、これでいこう。

「なのはさん、地球にパンダっていますよね？」

「また唐突だね……いるけど、それがどうかした？」

「パンダって見た目はカワイイですけど、地元では害獣らしいですよ。
基本的に肉食ですし、人間を襲うことも多いそうです」
「……それで？」
「……。スイマセン、話題選択を誤りました」
「……」
「……」
「……何か、ごめんなさい」
よく解らないが謝られた。
そのままなのはさんは教導に戻ってしまったので、僕は引き続き見学を行うことにした。
結局、その後も怒られることはなかったので、一応は許して貰えたのだろう。多分。
やっぱりなのはさんは優しい人だ。
オチ？そんなもの今まであったためしがない。これからもきっとない。

四話：集結、機動六課！（後書き）

思ったより読んでくれてる人が多いみたいで驚いた。
そして感想全く来なくて笑った。

五話：ファーストアラート（前書き）

少し日が開いたからといって文章の質や量が上がっているとか思わないように。
リアルが忙しくて暇がなかった結果がこの有り様だよ……

あと、こんなアホい小説もどきをお気に入り登録してくれてる猛者がいることに驚いた。
純粋に嬉しい、ありがとう！

……しかし、自分で言うのも何だが何故これをお気に入りにしたし。

五話：ファーストアラート

／

機動六課が始動してから、早いものでもう二週間が経過している。
新人達は日々訓練に勤しんでいるし、はやてさんは部隊長としての仕事、なのはさんは教導、
フェイトさんは執務官、シグナムさんとヴィータさんは交替部隊と出動など、毎日みんな大変そうだ。

僕はと言えば、相変わらず雑務担当として活動してはいたが、別段何か仕事を頼まれることもなく、
一日中仕事を探して歩き回っているか、何もせずぼんやりと過ごすことが多かったりする。

何となくだが、リストラされたお父さん方の気持ちが解ったかもしれない。
職を探すがなかなか見つからず、結局は毎日のように公園で俯く。
正に今の僕ではないか。いや、これは全次元世界のお父さん達に失礼だな。僕、給料は貰っちゃってるし。

特に何もしてないのにお金が入る。これが今流行りのニートというヤツか。
現状は養われてるようなものだし、あながち間違った表現ではない気がする。

《マスターは働こうとする意志があるので、根本的に異なると思われます》

「結果は同じでしょうに」

働いてないのにお金を貰うのがこんなに居心地が悪いとは思わなかった。

申し訳ない気持ちが強くてどうにも落ち着かない。

ニートとはある意味、もの凄く強靭な精神力が必要な職業なのではなかろうか。

……職業ではないな。職がないからニートなわけだし。

《マスター、思考が乱れていますが大丈夫ですか？》

心配してくれてありがとう。

でも、多分だけど大丈夫。きっとそういう仕様だから。

《念のため、湖の騎士に看て貰いましょう。実は疲労が蓄積していた、という可能性も捨て切れません》

「その可能性だけは捨て切れると思うんだけど……」

あまりにも暇過ぎて、近頃はザフィーラさんの毛繕いくらいしかしてないし。

それで過労なんて診断されでもしたら嫌過ぎる。どれだけ体力無いんだ。

「まあ、シャマルさんの所に行くのもいいかな。暇だし」

時間も潰せるし、大量に自作のお茶菓子とか料理も貰えるので一石二鳥だ。

この前はチーズケーキを渡されたが、なかなか独創的な感覚だった。

舌が多少痺れてきたものの、多分アレは美味しかったんだと思う。

ザフィーラさんにはしきりに身体の心配をされたが。
そして僕が言えた話ではないが、実はシャマルさんもまた六課の中では割と暇人に分類される。
医務室で待機しているので一応は職務中なのだが、ほとんど患者が来ないのでやることが無いらしい。
まあ、次から次へと瀕死の患者が運び込まれてくるよりはマシだが。
事実上、医務室に通ってるのは定期的に診察を受けてるなのはさんと、暇潰し目的の僕くらいではなかろうか？
「ザフィーラさんも誘ってから行こうかな。今日は毛繕いまだだったし」
《この時間ですと、中庭にいるものと思われます》
そんなことを話していると、いきなり警報が鳴り出した。
これは……一級警戒体制のアラートか。

／

アラートの正体は教会本部からの出動要請。
教会騎士団の調査部が追っていた、レリックらしきものが見つかったのだそうだ。
レリック……ロストロギア指定を受けた超高エネルギー結晶体、か。
過去に何度か大事故を引き起こしている、非常に危険な物体だ。
たしか、４年前の臨海第八空港の大規模火災の原因もこれだったと

思う。

そんな物騒過ぎる代物をガジェットは狙っているらしい。
理由はまあ何となく解る。見た目は小さいが、凄まじい魔力を内包したロストロギアだ。色々と使い道があるのだろう。

対象は現在、山岳リニアレールで移動中。内部に侵入したガジェットのせいで、車両の制御が奪われているそうだ。
車両内部のガジェットは最低でも３０体以上。飛行するタイプと巨大なタイプ、２種類の新型も確認されているらしい。

と、フェイトさんから通信だ。

『ラフト、今は大丈夫？』

「大丈夫ですよフェイトさん。ヘリには乗り過ごしちゃったんで、今から飛んで行くところです」

まさか置いていかれるとは思っていなかった。予想外にも程がある。
まあ自力で飛んだ方が速いので、ある意味で効率的と言えなくもない気はするが。手続きとか一々面倒だけど。

『お、置いていかれたって……』

「僕のことはいいんで用件をどうぞ」

絶句するフェイトさんに先を促す。いや、気持ちはますが。
僕も「ようやくまともな仕事だー」とちょっとやる気になってたら、既にヘリが飛び去っていた時はどうしようかと思った。

『ご、ごめん。
航空型はなのはと私で対応するから、ラフトには大型を頼みたいんだ』

「了解しました。適材適所ですね」

あの大きな新型は、新人達にはちょっとキツそうだし。
ＡＭＦの出力や、装甲も強化されていることだろう。無理に戦わせて何かあってからでは遅いのだ。
守ってあげられるうちは、しっかり守ってやらないと。

それに遠距離への攻撃手段を持たない僕は、高速で飛行する航空型とは少し相性が悪い。
単純なスピード勝負ならおそらく圧倒出来るが、一機ずつ追いかけ回す必要がある分だけ手間がかかる。
それに対し、全ての距離で高い戦闘能力を発揮出来るオールレンジアタッカーのフェイトさんと、
極めて優れた砲撃魔導師で中・遠距離戦のエキスパートのなのはさんなら、手っ取り早く一掃可能だ。

この２人が動くなら、もはや制空権は確保したも同然。地上にはガジェットの残骸が雨霰と降り注ぐことだろう。
やるならなるべくリニアから離れた位置で撃破して頂きたい。

「それでは、通信切りますね。そろそろ行かないと追いつけなくなりそうですし」

『解った。私も直ぐに向かうから』

通信終了と同時に、騎士甲冑を展開。

イクリプスが表示したリニアまでのルートを頭に叩き込み、軽くストレッチなどやってみる。

《飛行許可申請、承認済みです。最短距離を一直線に飛べば充分間に合います。行きましょう》

うん、それじゃあ行こうか。仕事の時間だ。

五話：ファーストアラート（後書き）

感想は随時募集中なんだ。
今更だけど、あとがきで言ってもあんまり見てもらえないよね？
しかし前書きで言えるほどの根性は無いのであとがきに書く自分はヘタレ。

六話：星と雷、時々拳（前書き）

時間掛かった割に色々悩んでたらグダグダになった件。相変わらずの低クォリティーに泣きたくなる。
緩い感じを出すのが大変だった……凄く、文才が欲しいです。

あと余談。最初はスカさんｓｉｄｅも書いてたけど、何か微妙だったから削った。

六話：星と雷、時々拳

／

《リニアレール、目視確認可能領域に到達。接触まで残り１１秒》

可能な限りの速さで現場まで飛んで来たのだが、既に戦闘は始まっているらしい。

此処に来る途中で航空型ガジェットに遭遇して足止めされなければ、もっと早く着いたのだが。

遅刻は遅刻だが、今回は不可抗力だと主張したい。

そもそもヘリに乗り遅れなければよかったのだから、あまり言い訳になっていないけれども。

それはそうと、僕は大型のガジェットの相手をしないといけないのだが……1機も見当たらない。

空でなのはさんとフェイトさんが凄い勢いで撃墜してるのは航空型だし、ＦＷ達は普通（？）のヤツと戦っている。

隊長2人は当然だが、ＦＷの４人にも援護は必要なさそうだ。

むしろ、手伝おうとして下手に交ざるとかえって連携の邪魔になる気がする。

結局、邪魔にならない位置で様子見しつつ、自分の方に向かってきたガジェットを破壊することにした。

これが意外と大変だ。何故か僕を狙うガジェットがやたらと多い。

何か僕に怨みでもあるのか。確かに結構な数を破壊してきたが、それならもっと凄い方達がいるんだけど。

ほら、今も桜色と金色の光がスクラップの山を築いてるし。
まあ仇討ちしようとあの2人に突っ込んで行ったら、確実に一瞬で返り討ちにあうだろうけど。

ああ、だから僕が狙われてるのか。

《マスター、出番です。大型のガジェットを3機確認しました。車内に潜伏していたようです。
2機は車両内部を祝福の風へ向け進行中、接触まで22秒。残り1機はライトニングが交戦中です》

イクリプスの言葉に、少しばかり緩んでいた脳が一気に冷却される。
視線をライトニング側に向けると、エリオが大型相手に苦戦していた。
助けに――いや、そうしたらリィンさんの方が間に合わなくなる。
かと言って、エリオとキャロではアレの相手はかなり危険そうだ。

「リィンさん側のガジェットを瞬殺してから、直ぐにエリオとキャロの援護。出来るかな？」

《敵性能が未知数なので断定不可。祝福の風救出までに最短で約36秒と推定されます》

正直微妙なところだけど、これ以上は考えている時間がない。

「イクリプス、多少無茶でも構いません。出来る限り速くケリを付けます」

《了解。カートリッジ・ロード》

次々と排出される空薬莢。カートリッジ3発分の余剰魔力全てを、加速のみに使用する。
これでも一応、速さにはそれなりに自信があるのだ。フェイトさんには負けるけど。

《Ａｓｓａｕｌｔ　Ａｘｅｌ》

術式の成立と同時に駆け抜ける。イメージは銃弾――いや、ペットボトルで作ったロケットみたいなアレか。
一直線に最速で移動するためだけの、あらゆる無駄を省いた魔法行使。

出力リミッター付きの現状で、可能な限り速く動くための苦肉の策。やり方そのものは簡単。限界まで溜めた魔力を圧縮し、一気に解き放って推進力に使うだけ。

欠点が一つ。リミッター付きだとまともに方向転換出来ない。
ついでに言わせてもらうと、防御とかもほぼ全て削っているので攻撃受けたら多分だけど簡単に撃墜される。

／

というわけで、リニアレールの窓をぶち破って内部に侵入。
端から見ると人身事故以外の何物でもないが、あくまでも侵入である。

幸か不幸か、侵入したその場所で大型ガジェットを発見。
ひとまず普通に殴りつけて破壊を試みたものの、ＡＭＦのせいか思

ったよりダメージはないようだ。
装甲は抜いたが、内部までは破壊しきれていない。カートリッジ無しだと一撃では無理か。
仕方ないのでカートリッジを一発ロード。右ストレートで今度は粉砕。
壁まで巻き込んで壊してしまったが、これも不可抗力なので許して欲しい。
背後から近寄ってきたもう1機も素早く処理し、次はライトニングの援護へ――行こうとした時、何か不吉なものが視界に入り、消えた。

「……」

今のは見間違いだと信じたい。
いや、だって、まさか、ね……

「ラフトさん、援護感謝です！ああっ！？ライトニングの2人が落ちてるです！？」

リィンさん、ご無事で何より。そしてやっぱり見間違いじゃないんですね。

「ていうかラフトさんも酷いケガですよ！？血とか凄いですけど大丈夫ですか！？」

多分、窓から突っ込んだ時にあちこち切ったんだろう。
でも大丈夫。もう傷は塞がったので。頑丈なのが取り柄だし。
それより早くエリオとキャロを助けないと。

《その必要はなさそうです。竜魂召喚を確認しました》

あ、本当だ。大きくなったフリードに2人共乗ってる。
そういえば、何気にフリードは初登場だ。いや、描写が無かっただけでずっとキャロに付いてはいたけど。

《メタ発言は自重したほうが良いかと思われます》

「その発言もメタ発言だとリィンは思います」

結論、みんな自重すれば世界は平和。

／

あの後、エリオとキャロの連携により残っていた大型ガジェットも破壊された。
リニアレールも無事停止、レリックも回収され今はスターズの2人が輸送の護衛。
ライトニングの2人は現場に残って引き継ぎ業務を行っている。
そして僕はというと、現在進行形で土下座中である。脚に砂利が食い込んできてなかなか痛い。

「またあんな無茶するなんて……。ラフトはもっと自分を大事にしないと」

「頑丈なら危ないことしてもいいってわけじゃないんだよ？」

「面目ない」

深々と頭を下げて反省を態度で示す。

今回のケガについて、フェイトさんとなのはさんは割と怒っているらしい。

心配そうな顔でこちらの身を案じるフェイトさんと、腰に手を当て「私は怒っています」という表情で窘めてくるなのはさん。

そして、そんな2人の前で土下座する男。我ながら非常に情けない絵面である。

「誰かのために頑張れるのは良いことだと思うよ。でも、そのせいでラフトくんがケガしたら意味ないんだよ？」

「ラフトは周りがどれだけ心配するか考えるべきだよ。ラフトだって、友達がケガするのは嫌でしょ？」

「仰る通りです」

それでも、きっとこの性分が直ることはないと思うけど。

自分が無傷のまま誰かが傷つくより、自分がボロボロになっても誰かを助けられたほうがいい。

そうやって、僕も救われたんだから。

というか、この2人も他人のことは言えないと思うんだけど。

何時だって自分のことは後回しにしてるくせに。

「ラフトくん？まだお話中だよ？」

「駄目だよ、ラフト。ちゃんと真面目に聞かないと」

「ごめんなさい」

やはりこの2人は読心術が使えるのだろうか。ちょっと思考が逸れただけで、それを敏感に察知するなんて。

「私もなのはも、ラフトとの付き合い長いから」

「それにラフトくんは分かり易いしねー」

クスクスと笑う2人につられ、僕も思わず頬が緩んでしまう。

それはそうと、もう正座は止めていいのだろうか？

そろそろ脚が限界なんですが。

六話：星と雷、時々拳（後書き）

主人公の設定とか需要があるのか否か。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5277o/

魔法少女リリカルなのはStrikerS:Cruel Formula

2010年11月24日09時03分発行